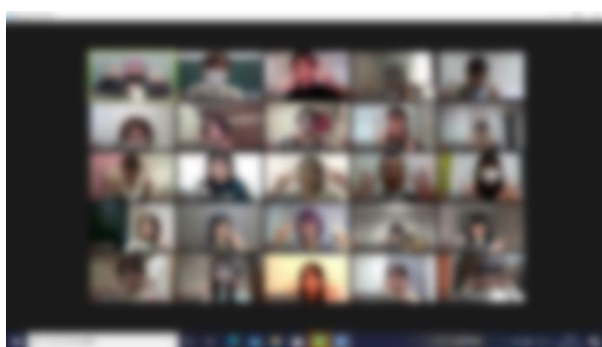


コロナ禍での奈良女生エピソード集



みなさまへ

コロナ禍での奈良女生エピソード集を手にとってくださりありがとうございます。2020年度は大学生活が大きく変化した年でした。学生生活の様子やさまざまなエピソードを募集したところ、34名の方から寄稿いただきました。34通りの大学生活の中に、それぞれの努力・悩み・思い・気づきが満載されています。立ち止まってしまうのではなく自ら考え行動していく様子に勇気づけられます。ぜひお読みいただければ幸いです。

奈良女子大学生協 専務理事 加藤由美

2021年5月 発行

奈良女子大学生活協同組合

コロナ禍での奈良女生エピソード集 寄稿のお願い

奈良女子大学生協
専務理事 加藤由美

2020 年はコロナの影響により、学生生活が激変した年でした。
学生さんの大学生活の変化、それにともなった苦労・工夫・奮闘などのさまざまなエピソードを記録として残したいと考えています。

対面授業、オンライン授業、食生活、健康、下宿生活、アルバイト、部活やサークル、実家、留学、など大学生活に関わることでしたらどのような題材でもかまいません。寄稿くださいませ。

冊子やホームページなどにして発行する際には、学部と学年とペンネームのみにして発行します。

原稿について

- Word で A4 1 枚程度 （とくに制限はございません）
- 学部
- 学科・コース
- 2020 年度の学年
- 氏名
- ペンネーム

原稿送り先 narajyoskato@wine.ocn.ne.jp （専務理事・加藤由美）

メールタイトル コロナ禍エピソード集寄稿

原稿締め切り 2021 年 3 月 31 日 23 : 59 まで

コロナ禍での奈良女生 エピソード集

通番

体験エピソード

【生活環境学部 20年度 2回生 JILL】

(1)

私は春休みに地元で自動車免許を取るつもりで帰省していたためコロナウイルスの流行が深刻になる前から実家で生活していた。前期の授業が始まるまではなんとなく英単語帳をばらばらめくってみたり、ピアノを弾いたりして過ごす毎日だった。私が受講する予定の授業が全てオンラインと決まったことで、前期は実家で生活することにした。友達と会えなくて寂しい、と言う人もいたが、私はむしろオンライン授業はどんなものなのか、実家にいながら大学の授業を受けるのはどんな気分なのか、といった好奇心の方が大きかった。

実際に受けてみると、移動時間などが無いため、普段そこに充てていた時間を他のことに使うことができたりして、非常に効率の良いやり方であるということに気づいた。これに加えて私の場合は実家にいたため、精神的にもリラックスした状態で毎日授業を受けることができた。唯一大変だったのは、設計演習という授業であった。建物を設計することもその模型を作ることにも初めてで、友達とLINEやzoomを使っていろいろ確認しながら協力して進めたことを思い出す。模型を作るための道具や材料は奈良に置いてきていたので新しく買ってなんとか揃えたりもした。そんなこんなで大変なこともあったが、前期はそもそも取っている授業が少なかったもので、時間は余った。

私は2回生の間は英語に力を入れるという目標があったので、残りの時間は英語に充てた。1回生の間はなんとなく与えられたものだけをこなしていくスタイルだったのだが、実家にいたので自分で全て考えなければいけなかった。そこで、具体的に短期スパンでの目標を立て、定期的に学習内容を見直し、状況に応じて計画を練り直していくようにした。私はTOEFLiBTという試験を受けなければいけなかったのだが、この試験は普通テストセンターで受けるものである。当時の私は外に出ることすら怖いと思っていたので、受けたくないと思っていた。ところが運良くETSがHome Editionというものを設けたので、自宅での受験が可能となった。自宅受験と聞いて、はじめはどんなものか全く予想がつかなかったがやってみると非常に便利であった。会場で受験する場合は、満席で予約が取れなかったりして日程を合わせることも難しいこともあるが、自宅受験の場合自分の好きな日時を選べ、しかも変更がきく。これは非常にありがたかった。

テストセンターでの受験ではいろいろなことを厳しく管理されるので自宅で受験したら不公平なのではないかと思ったが、全くそんなことはなかった。ProctorUという組織を通して受験するのだが、受験時はその監督に部屋の隅から隅まで見せ、耳や眼鏡、パソコンの裏やキーボードに細工がないか、などいろいろなことを細かく調べられた。そして常にカメラから監督されているので実際に試験場にいるかのような感覚だった。緊張したものの、ProctorUの人たちは皆とても親切だったので毎回気持ちよく受験できた。1度目の受験で、自分が勉強していたものとのズレを感じたので修正し、3ヶ月後の2度目の受験で大きくスコアを伸ばすことができた。1回生の時のスコアと比べると20点以上も違った。今まで頑張ったことが結果にあらわれてとても嬉しかった。前期はTOEFL無しに語れない。

後期からは奈良に戻り、対面オンライン併用の授業を受けた。前期の間家に引きこもりがちの

生活をおくっていたからか、後期はいろいろなことに挑戦したいと思い、アルバイト、サークル、キャリアデザインゼミナール、総領事カフェなど新しいことにチャレンジした。そのせいでこの半年間は人生で1番忙しかったが、その分新たな出会いや刺激があり、充実したものとなった。前期の間はなるべく外に出たくないと思っていたが、気を付けるべきことをしっかり守ればそこまで過剰に心配するものでもないと感じたのと、引きこもって大学生活を終わらせるのは嫌だという思いから、少しずつ行動範囲を広げていった。恋都祭休みに友人と出かけたのは良い思い出である。

2020年はコロナウイルスによって大きく変化した年であったものの、私はstay home期間を使って集中的に英語学習に取り組むことができたので、有意義な時間を過ごすことができた。後半は勉強に、課外活動に、様々なことに挑戦していろいろなことを経験することができた。規制は確かに多かったが、その中でできることを探して取り組んだのであまり不満もなく、むしろ良い1年だったと思う。

【文学部 20年度 1回生 奈良シカ子】

(2)

去年の3月、奈良女子大学から合格通知を頂いた私は、晴れて私も大学生の仲間入りだと心躍らせていました。しかし、4月には入学式が行われず、対面授業はGW明けからになるだろうというお知らせを受け、正直、出鼻を挫かれなかったといえは嘘になります。もちろん、コロナの脅威を考えれば、それも仕方がないことだと分かっていたのですが、予想以上の新型コロナウイルス感染拡大を受け、対面開始予定日は延期し続け、いつ対面授業が始まるのか分からないまま、アパートの自室でオンライン授業を受けるという日々が続きました。

今年はほとんどの部活やサークルも感染予防のため活動を自粛していたこともあり、おそらく多くの1回生は私と同じように、前期のうちは、家で授業と課題をこなすだけという生活を送っていたのではないかと思います。幸いなことに、私は体が強いほうなので、特に身体的な健康に問題はありませんでした。精神も完全に健康だったということはありませんでした。初めての1人暮らし、授業はオンラインでアパートに1人で籠っていると、様々な不安ごとが頭を悩ませました。

このようなことだけ書くと、前期の間は完全に暗い大学生活を送っていたように思われるでしょうが、悪いことしかなかったというわけでもありません。例えば、私は、奈良女・奈良教育・奈良県立大学の3大学合同英語コミュニケーション講座という大学生協主催の講座を受けていました。これは1年間、週1回18:30~20:00に行われていました。こちらの講座も大学の授業と同様にオンラインでの開催でしたが、英語でコミュニケーションをとれるようになるための講座ということで、受講生や先輩リーダーさんたちとの交流が多かったので、コロナ禍の大学生活では大変有り難い会話、交流の場だったと思います。その他にも、細々としたものではありますが、私の中で良い変化も生まれました。上記の英語コミュニケーション講座もそうですが、今までよりも少し積極的に動けるようになってきたのです。積極的に動くと言っても、学校で同回生の子たちに会う機会があれば、自分から積極的に話しかけるなど、小さなことばかりでしたが、本来、新しい場所へ飛び込んだり、自分から行動を起こすことが大の苦手だった私にとっては大きな変化でした。これは、コロナ禍で、できることが制限されていたからこそ、できることをしようとなけなしの勇気をだし、行動した結果だったと思います。

長々と書きましたが、ここまでが前期の大学生活についてです。おそらく、私にとってこの1

年間で最も大きな転機は 8 月下旬から 9 月までの夏休みだったのではないかと思います。先ほど、前期の間に私の中で小さな変化が起こったと書きましたが、その変化が目に見えて分かるほどになったのは夏休みの間だと思います。テスト期間が終わり、夏休みに突入すると、私は人生初バイトを始め、車校にも通い始めました。人と接する機会が格段に増え、ボランティアにも参加しました。そうすると、これらの何がきっかけだったのか、あるいはすべてが後押しとなったのかは分かりませんが、帰省した際、家族から「表情が少し晴れやかな感じに変わった」と言われました。人生初のアルバイトは、お給料が発生するのだから、仕事をしっかりしなければというプレッシャーがあり、失敗したときは凄く落ち込みますが、社会人として働く前の準備の場、人生経験の場としては凄くよいものだと思います。

後期は、私自身もそうですが、対面授業が少し増え、友達をつくる機会や友達と会う機会も増えたため、前期よりも精神的な余裕をもち、学校生活を楽しむことができたという大学生の方もたくさんいらっしゃるのではないかと思います。また、先述したように、前期や夏休みの間に、ある程度「できることをする」という姿勢がついたおかげか、後期は、サークル活動、ドイツ語検定受験など、積極的に行動しようという思いが一層強まり、行動できたのではないかと思います。

この 1 年間は色々なことを我慢しなければならなかった年でしたが、そのことが逆に、自分で考え、行動する力を養ってくれたように思います。

【理学部 20 年度 2 回生 ふく】

(3)

私にとって 2020 年は、他の年に比べてあっという間に過ぎてしまった、という感じがします。オンライン授業がほとんどで、一限目から授業があってもギリギリまで寝ることができたのは良かったですが、個人的に対面授業の方が集中して取り組めるなぁと思いました。

私が 2020 年で特に気づかされたことは、人と会い話すことの大切さです。今までは、大学に行って必ずどこかで誰に会ってお話しをすることができましたが、それができなくなり、さらに一人暮らしということもあって、とても寂しかったです。自分ではそんなに自覚がなかったのですが、私は人と会って話すことが好きなんだなぁと気づきました。

また、一人の時間ができた分、将来について考えることが増えました。院に進学するにしろ就職するにしろ、就活をすることは経験した方が良いと思い、これからどうしていくか考える予定です。今までは全く興味がなかった TOEIC の勉強も、するようになりました。2021 年がどのようなになっていくのか全く分かりませんが、自分なりに頑張って時間を有効に使って過ごしていきたいです。

【文学部 20 年度 1 回生 パンダ】

(4)

長い受験を終え、やっと迎えた大学生活のスタートは、オンライン授業という思いもしなかった形でした。慣れない状況、様々なことが思うようにいかない中で、私は数年後にこの時期の自分を振り返ったときに、後悔が無いように過ごそうと決めました。そして、大学の授業をきちんと受けるのは大前提で、いくつかの挑戦をしました。

一つ目は、学童保育のアルバイトを始めたことです。家にこもってオンライン授業を受けるばかりの日々の中で、何か新しいこと、また、人の役に立てることを始めたいと思いました。そん

な時見つけたのが、学童保育です。私は一人っ子なこともあり、小さい子のお世話をした経験はあまりありませんでしたが、周りの方々に優しく教えていただきながら、徐々に慣れることができました。この春も、帰省時に声をかけていただき、出勤しました。今では、無邪気な子どもたちに元気をもらえるこの仕事がとても好きになり、大学4年間続けられたら良いなと思っています。

二つ目は、ピアノのコンクールに出場したことです。ピアノは、私が幼少期から続けている唯一のものです。ほとんど毎年コンクールに出てきましたが、コロナの影響で延期や中止のものも多く、流石に無理かなと当初は思っていました。しかし、今諦めたら後悔すると思い直し、あるコンクールに出場しました。下宿先にピアノが無いため、後期は練習がままならない時もありましたが、結果全国大会に出場することができました。2021年は、よりピアノを頑張ろうという気持ちになれたのも、2020年のこの挑戦があったからこそだと思います。

振り返ってみると、コロナ禍でも自分なりに行動できた一年だったと思います。そもそも、大学生活そのものや、それに付随する様々なこと（一人暮らし、サークル、第二外国語等）が、私にとって初めての体験で、2020年は予期せぬ形ではあれど、意味のある一年でした。何より、様々な経験を通じた、人との出会いが一番嬉しかったです。これから始まる大学生活、多くの人との出会いを楽しみに、様々なことに挑戦していきたいです。

【文学部 20年度 4回生 me】

(5)

私は大学3回生の頃から就活を始めインターンなどに参加していましたが、丁度正式に就活が解禁される3月から数多くの就活イベントが軒並み中止・延期、またはオンライン開催になりました。例年と状況が違ふことで、就活生も企業側も戸惑っていたように感じます。私はオンライン上での説明会・面接が殆どでした。交通費・移動時間がかからなかったのは便利でしたが、面接官の声が聞こえなかったり、私のカメラがオンにならなかったりなどといった接続のトラブルもありました。面接前は「きちんと接続出来るか」と本来であればしなくてもよい心配をしなければならなかったです。

私はコロナ前に開催された対面でのインターンに参加していた企業に就職することになりましたが、面接も内定式もオンライン開催だったため、去年の3月以降はその企業の方にも同期となる就活生にも一度も直接会ったことがありません。来月からその企業で働きますが、まだ知り合いがおらず心細いなというのが正直な心境です。

【生活環境学部 20年度 2回生 ツヨシ】

(6)

コロナウイルスの感染拡大により、多くの人の生活に変化があったと思います。私の生活リズムにも大きな変化がありました。2020年の4月から6月の自粛期間はアルバイトもなく、授業もすべて非対面での開講であったため、一日のほとんどを自宅で過ごしました。部活動もできず、友人にも会えない、私は下宿をしているため家族にも会えない生活が続きました。しかし、私自身この期間、および私の大学2回生としての1年間をそれほど悲観していません。なぜなら、この時生じた自宅で過ごす時間を有効に活用できたと感じているからです。

具体的には、外食を控えることで自炊を楽しめるようになった、通学時間がなくなったことで課題や資格の勉強時間が増えた、などです。好きな音楽や映画なども沢山増え、その状況下で最

大限自分の楽しみを見つけることができました。まだまだ気を抜くことの出来ない状況が続くと思われますが、感染拡大の一日も早い終息を祈るとともに、今後も貴重な大学時代を自分の興味を広げる充実した時間にできればと考えています。

【生活環境学部 20 年度 2 回生 りんご】

(7)

奈良で一人暮らしをしている為、もし自分がコロナに罹ってしまった場合、頼れる人もあまり居ないし、アルバイト先などにも迷惑をかけてしまうと思い、クレベリンやアルコール消毒剤を買ったりして健康管理にはより一層気をつけました。

また、もし自分が罹患してしまった時、パニックになって誤った行動を取らないよう、まずはどこに連絡してどこに行けばいいのかなど、もしもの時に備えて確認事項を作っていました。

【生活環境学部 20 年度 3 回生 マイ】

(8)

想いに共感し、一つになって実現した履修相談会

私たち奈良女子大学生協学生委員会 WINDY は、大学の関係各所と協力しながら「新入生の不安を解消したい」という強い想いで、オンライン履修相談会に向けて一丸となりました。

毎年新入生の 9 割が参加する履修相談会は、冊子の配布とスライドを使った説明で履修の組み方を教え、個別で質問に答えて疑問を解消する企画です。同じ学部の先輩に直接質問をして一緒に履修を組める点が魅力で、私自身も新入生の頃に、この相談会で WINDY に助けられました。2020 年は 4 月の初旬に対面での開催を予定して前年の秋から準備を進めていました。しかし、感染症の影響でその他の新学期活動が中止になり、相談会も中止にするべきではないかという考えが大きくなっていきました。そんな中、大学の教員から、大学とうまくコミュニケーションがとれず不安を感じる新入生のために履修相談会はぜひ行ってほしいという声があがり、学務課との共催で相談会の実施に向けて取り組もうという提案がありました。日頃の委員会活動の様子が教員や大学職員に届いていることを実感し、また WINDY も「新入生の不安を解消したい」という共通の想いを持っていたため、協力して相談会を成功させようという覚悟を決めることができました。

オンラインツールの利用を検討しはじめたものの、WINDY の活動の中では前例がなく、履修相談会の魅力である先輩の寄り添ったサポートができなくなるのではないかという不安の声も WINDY 内であがっていました。そこで不安をなくし活動に意欲的になるために、オンラインイベントを実際に行っていた団体や他大学の情報を集めました。メンバーと実際に様々なツールを使ってイベントのイメージをすることで、オンラインの可能性の大きさを感ずることができました。対面で用意したものをそのままオンラインに落とし込むのではなく、オンラインイベントだからこそのことを模索していこうという姿勢を持ちました。さらに実現性を知るだけでなく、共通の想いを持つことも全体で意識しました。状況が変わっても私たちが履修相談会を開催するそもそもの目的である「新入生の不安の解消」という想いは変わらないことを再確認しました。その結果、WINDY 全体で前向きにオンライン相談会の準備に取り組むことができました。

ツールの中では LINE のチャットライブ機能に目をつけました。普段から使っている慣れ親

しんだアプリで、新入生も WINDY も利用に不安を感じない点と、WINDY 側のみカメラが ON で新入生はその映像を見ながら気軽にチャットを送れる点が選んだ理由です。オンラインに対する心理的な障壁を下げることを一番意識しました。新入生の現状を知るために情報収集をするなかで、新学期が始まって一度も登校しておらず同級生との繋がりが全く持てていないという話も聞きました。そこでチャットライブを使う際に必要となる LINE グループを、新入生同士や先輩とつながれるコミュニティにしました。また、これまで対面で開催したときは、開催する 2 日間みのサポートでしたが、LINE グループを使って、新入生に事前に知りたい情報や質問を集めて配信の準備をすることと、配信後にも質問を受け付け答える長期的なサポートを行うことにしました。

このように相談会の準備を進めていき、無事オンライン履修相談会を成功させることができました。配信後に感謝の声がチャットに多く送られた光景は今でも心に残っています。私たち自身も大変な中オンライン企画という新たな挑戦ができた一番の原動力は、奈良女子大学が好きだという想いでした。この頃 SNS で、「奈良に來たけど誰とも交流できず不安で、実家に戻りたい」という新入生の声が多く見られました。私自身は入学したときに新生活に期待を膨らませていたし、出会った友達ともすぐ仲良くなってワクワクした気持ちで大学生活をスタートさせることができました。大好きな奈良女子大学を次の新入生にも好きになってほしい、大学を入学したというワクワクした気持ちを持ってほしいと強く思っていたため、不安があっても動き出すことができました。そして「やっぱり WINDY の企画ってすごい」、「WINDY の力で色んな人の支えになれるんだ」という自分たちの力を信じる気持ちを持っていたことで、困難があっても最後までやり抜くことができました。他の WINDY の仲間も共通した想いを持っていたと思います。WINDY、奈良女子大学生協、奈良女子大学の全てが想いに共感しあって一つになることができた取り組みとなりました。

【生活環境学部 20 年度 3 回生 YN】

(9)

初めて新型コロナウイルスに関するニュースを目にしたのは 2020 年 1 月半ば、友人と海外旅行を楽しんでいた時のことです。その時はこれからの 1 年がこれほどまでに重く辛い、大変な 1 年になるとは露程も考えていませんでした。

それからすぐに、海外旅行はおろか、ちょっとした外出も躊躇われるような日々が始まりました。私の大学生活は一変。アルバイトをしていた飲食店は閉店し、もう一つのアルバイト先もシフトがゼロになりました。前期の授業は全てオンラインとなり、1 日中パソコンと向かい合う生活です。たまに外に出た時に見る、道行く人が皆マスクをつけている光景はひどく異様なものを感じました。そんな生活が始まり、私はなんとなく心に負担を感じるようになりました。1 人暮らしの狭い部屋の中で誰にも会わない、会えない生活のストレスに加え、自分や家族が感染したら、自分のこれからの進路は、といった先の見えない不安で気分が落ち込むことも増えました。一番辛かったのは、何か行動をしようと思った時に「誰かから批判されるのではないか」という意識が常に捨てられないことです。

暫く経って外出自粛が緩和され、後期は対面の授業も増えて、多少自由に動けるようになってからは少し調子も戻ったように感じていました。しかし生活の変化にも慣れてきたはずの 10 月頃、私は再び気持ちが落ち込むようになります。それはコロナ禍初期のもの以上でした。最も変化があったのは食生活です。私は不安やストレスのほとんどを食べることにぶつけました。自制

することができず、その自分に嫌悪感を抱き、何度も涙を流しました。大好きだった自炊も怖くなり、段々回数が減っていきました。コロナ禍の生活で少しずつ溜めてきた疲れや不安、向けどころのなかったエネルギーが一気に溢れてしまったのだと思います。今は少し落ち着き涙を流すことはなくなりましたが、やはり食べものに対しての自制心は未だ抑えられないことがあります。

新型コロナウイルスが発生してから、あっという間に1年以上が経過しました。私は3月に20歳を迎え、思い出に残る節目の年になるはずでしたが、全く違う意味で一生忘れられない1年間となりました。地元で5月に予定されていた成人式は8月、11月と再延期になりました。1回生の時に振袖を選び、1月に成人式に出席した友人の振り袖姿を見ながら、久しぶりに地元の友達と会えることを楽しみにしていた気持ちはいつしか消え、私は不参加を決めました。将来20歳を思い出す時はきっと、楽しかった思い出よりコロナ禍の辛かった思い出が先に思い出されるでしょう。

私と同じ大学生の中には私以上に辛く、大変な思いをしている学生が沢山います。毎日を生きるために必死にアルバイトをする学生や、雰囲気が伝わりにくいオンラインで就活を頑張る学生、1年以上母国に帰国することができていない留学生、入学以降一度も入構することなく2年生を迎える1年生。たった4年のうちの貴重な1年がこんな形で過ぎ去ってしまいましたが、本当に皆よく頑張ってきたよねと学生の皆さんに伝えたいです。始まりがあれば、必ず終わりが来ます。なにも気にせず人と会える日常が、大学生らしい大学生活が、一刻も早く戻ってくることを心から願います。

(10)

【文学部 20年度 3回生 ⅠA】

変化した私の大学生活

4月上旬のこと。私は当時所属していた生協学生委員会 WINDY の受講相談会の開催に向けての準備に追われていた。この頃はまだ大学内に入ることが可能で、かろうじて大学の友人たちと直接会える日々が続いていた。例年学期初めに行われる学科別のガイダンスも、学生間の距離を保った状態で実施された。その際、周りの友人からは「バイトの勤務時間を短縮された」「シフトを減らされた」という話を聞いた。市内のホテル内の売店(土産物売り場)でアルバイトをしていた私も、その例外ではなかった。客足は3月ごろから徐々に減少していき、4月に入ると一日にお客さんは一人か二人しか来ない日が続いた。そのため、一回の勤務時間につき30分程度を短縮させられていた。授業の開始は延期され、先の見通せない不安な日々が続いていた。

4月16日。緊急事態宣言が全国に拡大され、私の住む奈良県もその対象となった。そして、その宣言が発令される前日にアルバイト先の休業が決定した。また宣言の翌日には、キャンパス内への立ち入りが全面禁止となり、ゴールデンウィーク明けまでは授業が行われないことを知らされた。この時点では、連休が明けてしばらくしたら、アルバイトも再開し、授業も開始されるような状況だと思われていた。外出できない閉塞感があった一方で、不謹慎ではあるが、非日常感到少しワクワクしていた記憶がある。生協の教科書販売は郵送で行われることになったが、私は大学正門の前にある学生寮に住んでいたため、パートさんが寮まで教科書を届けてくださった。人によって購入する教科書は異なり、それなりに重さもあるにもかかわらず、パートさん自ら届けてくださったことに温かさを感じた。

連休中のこと。遠隔授業実施のめどがたってきて、複数の講義について先生方から連絡が来は

じめた。アルバイト先の休業は延長され、そろそろ生活がまずいんじゃないかと考えるようになった。というのも、私は両親から仕送りはもらっておらず、バイト代と奨学金のみで生活しているためである。バイトのお給料はしばらく経ってから振り込まれるので、5月のいっぱい生活の見込みはあった。しかしながら、今働かなくては6月以降収入の見通しが立たず、就活するとき用にためていたお金を切り崩すほかないうだろうな、なんてことを考えていた。

連休が明けてからは、遠隔授業が始まった。毎回ミニレポートを課される講義が多く、友人たちとLINEで頻繁に連絡を取り、励ましあいながら課題に取り組んでいた。自身のバーチャル背景の画像を頻繁に変えてみたり、隣に住んでいる友人の部屋に転がり込んで、同じ授業を一つのパソコンで受講し、授業中にその内容に関してああでもないこうでもない議論したりするなど、自分なりの方法でオンライン授業を楽しめるものにしようと工夫していた。ただ、大学の中に入れないということは、大学の図書館も利用できないということであり、ゼミ発表のための資料は、ネット閲覧できる論文に限られてしまい、非常に苦労した。

学生委員会活動に関しては、困難を極めていた。このような状況下でも学生間のつながりは絶つまいと、オンラインで試行錯誤しながらも部会を開催していた。当時のWINDYは、総代会と毎年大学と協力して行うオープンキャンパスという大きな企画を控えており、そのために準備してきた仲間のためにも、部会をやめるわけにはいかなかった。今でこそZoomが普及しているが、当時はどのようなオンラインツールを使用するのがよいかかわからず、LINEのLiveチャット機能と併用しながら、情報共有を行っていた。しかし、家から出られないこと、またオンライン授業による疲れが次第に出てきて、疲弊しながらもなんとか繋がりを維持している状態だった。一年近く経った今でも、あの時どうするのが正解だったのかはわからない。

そんな生活の中で、一番忘れられないのが生協の手作りお弁当だ。大学から差額を支援してもらえるおかげで、なんと一つ180円で購入することができた。このお弁当はコロナ前もずっと購買で販売していたお弁当で、今までと変わらぬ味で食べた瞬間ほっとした記憶が鮮明に思い出される。

【文学部 20年度 2回生 たこめし】

(11)

コロナとの付き合いはもう一年前にもさかのぼる。コロナの影響で、三月から様々な行事の中止が決まり始めていた。大学の新歓企画や母校の部活の定期演奏会が中止になり、小学生の妹が休校で毎日家にいるようになると、「四月からの大学にも影響するかな？」くらいに漠然と考えるようになった。四月になり、授業開始日の延期が発表されると、私はがっかりするどころかむしろ「やった、春休み延びたじゃん！」と大喜びしたのである。しかしそんな風に喜んでいられるのは始めの間だけだったのである。

いざオンライン授業が始まってみると、zoomの使い方は全く分からないし、自宅での受講環境を整えるのは大変だし、インターネットにずっと張り付いていないと情報を取り逃すし、と大変なことばかりだった。学校は当初、感染状況が落ち着き次第対面授業を再開するという方針だったので、対面授業の開始日が延ばされるたびにかなしい希望が潰れてくような感じがした。また、オンライン授業になって初めて実家暮らしの弊害に気付いた。家のどこかには大抵家族がいるため中々集中できないし、家の生活サイクルと全く異なる時間で動かないといけなくて家族を困らせることになった。そして何よりも応えたのは、学術情報センターを利用できないということだった。レポートの問題には「必ず文献を参照すること」と注意書きがあるのだが、この

状況下で往復三時間かけて奈良まで行く勇気が私にはなかった。結局地元の図書館で文献を探したのだが、専門的な書籍はあまり置いていなかった。何度「下宿していたらすぐに学校に行けるのに!」と思ったことか。昼食をとるのにも毎日同じようなメニューに飽き飽きし、生協のTwitterを見て食堂に足を運びたくなったものである。

しかし、これらを超えて圧倒的に辛かったことがある。それは「友達がいない」ということである。二年生になり学科に配属されたが、同じ学科に進む一年時のクラスメイトは三人、ましてやコースとなると一人しかいなかった。サークルや他学科の友達はいたのだが、同じ学科の友達がいないということは中々にしんどかった。聞き逃した提出物の締め切りを聞くことも、明日の授業がオンラインか聞くことも、あり得ないくらい大量に出る課題について愚痴を言い合うこともできなかった。本当に辛かった。世間では大学一年生の子たちが友達を作れずに困っている、ということがよく話題になっていた。そのせいか、学校や学生団体が例年より多くの交流の機会を作っていたように思う。しかし私は二年生だ。そのようなサポートがあるはずはなかった。一年生の友達作りのサポートをしている自分には友達がいない。何ともおかしい話である。

やがて後期になり対面授業が始まった。オンライン授業と対面授業が並行して行われることによる大変さもあったが、それ以上に対面授業のありがたさの方が勝っていた。まず友達ができた。対面で会えることはやはり偉大である。授業でディスカッションをしたときにも「こんなに人と話すのって楽しかったっけ」と心の底から感じた。久しぶりに生協の美味しいお弁当も食べた。雨が降っていたので割引になって、ちょっと嬉しかった。サークルの友達にも久しぶりに会った。zoomで話しているときにも楽しいと思ってはいたが、対面で話すとタイムラグがない分トークにスピード感があるし、直に聞こえる笑い声にとっても心が弾んだ。オンライン授業にも慣れてきて、負担にならない授業の受け方・効率の良い課題の進め方ができるようになった。この一年は本当にものすごい量の課題に取り組んだと我ながら思う。

今でこそオンライン授業にもまあいいところがあると思っているが、2020年が私から様々なものを奪っていったことに間違いはない。もちろんそれは大学生活に関してだけではなく、趣味や習い事、ましてや大切な家族に会う機会さえも奪われた。私は決して前向きにこの一年を乗り切ったのではない。ただただ初めての状況に困惑し、気が付いたら一年が経っていただけなのである。今願うことは「普通の生活」を送りたいということ。そのために私は今日も自粛するのだ。

【大学院 20年度 2年 もっちゃ】

(12)

コロナウイルスの大流行によって、日常生活は劇的に変化しましたが、個人的にはなんとなくその変化も楽しみながら乗り越えられた1年だったように思っています。

【学業について】

私は、昨年の春に病院での実習を予定していました。しかし、タイミングが悪く、コロナウイルスの爆発的な流行と重なり、予定していた実習先に行くことは叶いませんでした。その時は、「病院での実習なしで卒業か…」とがっかりしていましたが、先生方が調整してくださり、結果的にオンラインでの実習や他機関での実習でカバーすることができました。従来の実習の形での経験は積みませんでしたが、過去の修了生が行ったことのない実習先に行かせて頂き、また、複数の機関で実習させて頂いたのは、ある意味で貴重な経験であったと感じています。実習に関しては、私の専攻は、大学施設を使うことが多かったため、緊急事態宣言中は施設が使えずもどかしい思いもしましたが、その後の実習は、感染症対策に十分留意しながら継続的に行うことが

できました。また、講義など、オンラインで対応可能なものはオンラインで実施されました。自分のPCや自宅Wi-Fiの調子が悪く、ディスカッションに参加できないこともあり、今となっては笑話ですが、焦ることもありました。授業等でオンラインツールを使う機会が爆発的に増えたため、扱いには慣れることができました。他大学もオンラインで授業をしていることもあり、先生や知人の紹介で、他県の大学の授業やゼミに参加させて頂けたのは、本当に貴重な経験でした。

【サークル活動について】

私は、SOGI サークルならていぶという、発足2年目のサークルに参加していました。これからメンバーを集めていこうという時期に、課外活動が全面禁止になってしまいました。そこで、メンバー募集や普段の活動にzoomやwebEXなどのオンラインツール、SNSなどを積極的に活用することにしました。正直、オンラインツールやSNSにはあまり慣れていなかったため、使わざるを得ない状況になったことで四苦八苦しながら使い方を覚えていきました。対面活動のような雑談をすることは、オンラインツールでは難しいですし、対面活動の直接的な代わりにはなりませんが、対面活動が出来ない分を補うものとして、オンラインツールを用いたサークル活動の方法について知ることができたのは、とても良かったです。また、オンラインツールを使うことによって、距離を気にせず様々な人と交流することができたのは、サークル活動においてプラスに働いた部分でもあったかと思います。11月には全てオンライン開催で大学連携企画「Narajo ALLY WEEK2020」を開催することができました。コロナが落ち着いたら、対面で開催されたらいいなと思います。

制限されることが多かった1年間でしたが、その中で新しく出来たことも沢山ありました。私にとってはとても充実した1年間でした！この1年で学んだこと、繋いだ関係を大切に、新年度も頑張っていきたいと思います。

【大学院 20年度 1年 すだち】

(13)

入学式がなく、いつの間にか大学院生になっていました。よくわからないまま始まった前期、慣れないオンライン授業、あっという間に溜まる課題、これらをひとりで乗り切らなければいけないという、学生にとって過酷な一年だったと思います。学部時代、授業も課題も友人と一緒に頑張れたわたしにとっては、何よりも「ひとり」ということが最も辛く感じました。そんな中でも、数名の知り合いと学部時代お世話になった先生方のおかげでなんとか乗り越えた！という感じです。

と、こんな風には書いてみると、最悪の一年のように聞こえてしまいますが、プラスの変化ももちろんたくさんあります。立派なことを書きたいですが、ここはあえて率直に身近に起きた変化を挙げてみようと思います。少しだけ自炊をするようになった、部屋着にお金をかけるようになった、パソコンを新調した、自宅でできる新たな趣味が見つかった、などなど。また、昔から、旅行や外食が大好きなわたしですが、この一年を通して、近くのパン屋さんでパンを買ったり、お菓子屋さんでちょっといいお菓子を買ったり、といったもっと近くに以前からあった小さな幸せに気付くことができました。

これから先、予想もしないことに巡り合うかもしれませんが、この一年で身につけた発想の転換が活かせるなと思うと、何が起きても楽しめそうです。最後に、この記録は、「コロナ

禍のいま」を大学で過ごしたわたしたちにしか作れないものだと思います。素敵な企画に参加させていただき、ありがとうございます。

(14)

【文学部 20年度 1回生 M】

私がコロナ禍での大学生活で一番苦勞したことは友達づくりでした。入学式をはじめとした様々な新入生向けのイベントや新歓活動が中止となり、前期の授業はすべてオンラインになったことで、同じ1回生と直接会って話す機会がほとんどない状態でした。

前期の間は実家の方へ帰っていたので、生活の中で寂しさを感じることは少なかったのですが、大学の友達とのつながりがなくて漠然とした不安がありました。平常時であれば、友達と雑談をするなかで知っていくようなこともあると思いますが、リモートでは他の人の様子が分からなかったため、自分のやっていることが正しいのか不安に感じながらもなんとか手探りで進めていたという感じでした。なかにはオンラインの交流会の開催や、グループワークで友達づくりの時間を取ってくださった授業もありましたが、画面を通してでは人柄や雰囲気が伝わりにくく、オンラインでのコミュニケーションの難しさを実感しました。

後期の授業は語学や実技の授業で一部対面授業が取り入れられ、一人暮らしをはじめました。対面授業は週に2コマ程度でしたが、オンラインで話していたクラスメイトと実際に会って授業を受けることができました。また、学食や図書館を利用するなど、前期と比べると大学生らしい生活を送ることができたように思います。しかしながら、大学のシステムや施設の使い方などについて、まだまだわからないことが多いというのが現状です。自分が大学生になったという実感がなかなか持てないままの一年でした。

(15)

【生活環境学部 20年度 1回生 れみ】

入学式もなく始まった大学生活でしたが、私はラッキーなことに下宿の隣の部屋の子が同じ学科の同級生で、さまざまな確認事項などを共有することができ、友達ができなくて寂しい！と感じることはありませんでした。とはいえ1回生だけではわからない履修のことや大学生活のことについてはWINDYの皆様に非常にお世話になりました。ためになる企画をオンラインで開催してくれたことは私だけでなく1回生みんな本当に感謝しています。

昨年春の入構禁止期間は、5月末にアルバイトを始めるまでは完全に家にひきこもりで、孤独と山のような課題と戦っていました。正直あこがれていた大学生活とは全く違って楽しくなかったし、ひとりで1日中パソコンを見ているのは辛いことでした。ストレスからお菓子を暴食してしまうことや寝るときに不安になって寝付けなかったこともありました。アルバイトは一つですが多い時は週5勤務があり、課題との両立が困難でした。夜間のアルバイトなので生活リズムが崩されて体調が崩れることもありました。現在は慣れていい気分転換になっています。

食物栄養学科では対面授業が比較的多く、学科の人と会えるようになってからは対面のよさを感じる日々でした。家で一人だと集中できないこともありましたが、対面授業は意欲をもって授業に臨むことができました。だんだんと学科の友達やボランティア活動などで知りあった友達も増え、息抜きができるようになりました。

変な生活も1年が経つと慣れるもので、オンラインの扱いやレポートなどはこなせるようになりました。だけどやっぱり私は対面の活動に勝るものはないと改めて思っています。他人と壁

のある大学生活がはやく終わればなと切望します。

(16)

【理学部 20年度 3回生 AN】

●対面授業、オンライン授業

オンライン授業のツール、授業の課題提出方法などが多様で、確実に授業参加、課題提出が出来るか不安になるところがありました。また、授業の課題数が増え毎日パソコンの画面を眺め、一日過ぎる日々でした。

同じコースのLINEだったり、個人的に友達に相談したりして乗り越えられたと思います。

●食生活

テイクアウトを行っていなかった店舗などでもテイクアウトが始まり私にとっては、テイクアウト巡りが1つの楽しみでした。

●下宿生活

共同で使うものなどに少し気を配るようになったり、玄関でアルコール消毒を実施するようになったりと世の中の常識の変化を痛感していました。

●アルバイト

コロナ禍で激減しました。しかし、Gotoの影響で急激に増えた時期もあり、そのギャップがとても大変でした。アルバイトの募集をかけなければならぬときも学内掲示板が使えないなど募集方法の制限があったりしたため苦労しました。

部活やサークル

オンライン会議になり、予定していたことが行えずもどかしい気持ちが大きかったです。引退も普段のように行えなかったのも、少し悲しいと感じていました。しかし、週1回でも人と話す機会、笑える機会があったことで救われてる部分も大きかったし、本当にこのサークルに所属して良かったと感じています。

実家

実家の方が田舎なので、関西圏からの移動の制限などが激しく、なかなか帰省はできませんでした。しかし、地元は里帰りは規制しているが、観光客の往来は歓迎していて何か矛盾しているなど感じてました。

【生活環境学部 20年度 2回生 きりん】

(17)

●授業について

2020年は前期がすべての授業がオンライン。後期になると対面授業も多く出てきた。

オンライン授業で使われる会議ツールの利用にあたってはそれほど戸惑わなかった。しかし、パソコンと向き合う時間の増加による身体的疲労が辛かった。積んだ本の上にパソコンを置き視線の高さをディスプレイと合わせたり、ブルーライトカット効果の高い眼鏡に変えたりといった工夫で軽減された。

いつもより遅く起きられたり、興味のある勉強をしたりと、オンライン授業により生まれた時間を有意義に過ごせていたと思う。友人たちと会えない分は、テレビ電話などでたくさん話して交流していた。

後期になるとオンラインと対面が併用された。授業の兼ね合いで結局は大学に行かねばならなくなるケースが多く、余裕のない忙しい日々だった。Wi-Fiの繋がり具合などによって大学の中でも授業を受けられる場所は限られてしまい、寒い中廊下の端のラウンジで凍えながら受けていたときもあった。刻々と変化する状況で、住環境学科の対応が迅速かつ丁寧だったことが救いだった。授業の対応やインターネット環境の整備、アドバイザーとの面談など、きめ細かい対応で不安が和らいだ。

●留学について

昨年2月から3月にかけて、大学のプログラムを利用しニュージーランドに行っていた。ちょうど日本でもコロナが流行の兆しを見せており、帰国に備えて大量のマスクを持っていたことを覚えている。

ニュージーランドでの暮らしは基本的には穏やかだったが、日本人の友人は現地の人に差別的な言葉を吐き捨てられたことがあったという。海外ではアジアが「コロナウィルスの流行の始まった場所」と認識されていることを実感したし、普通に街を歩いていても、差別を受けなくとも少し肩身が狭かった。前述のように少し悲しくなることもあったが、これから暫くは簡単に渡航できない状況が続くと予測されるため、ギリギリのタイミングで異国での生活を体験できて本当によかった。

また、今年の2月にオーストラリアへのオンライン留学プログラムにも参加した。オンラインゆえ、どんなものになるのか不安が大きかったが、ツアーはまるでその場にいるかのようにオーストラリアの雰囲気を感じ取れたし、現地で働く様々な日本人の方のお話が聞けた。語学に励むモチベーションアップだけでなく、これからのキャリアを考える上で非常に為になった。コロナウィルスによって実際の渡航は阻まれるが、パソコン一つあれば参加できる留学もあると考えると、逆に留学へのハードルが下がったともいえる。今の我慢の状況を逆手に取り、積極的にチャレンジし続けたい。

【文学部 20年度 3回生 Lily】

(18)

「2020年8月～2021年2月まで留学に行くために奨学金制度に応募する。もし選ばれなかったら、実費でワーキングホリデーに行く。どちらにせよ、努力が必要だから、死ぬ気で頑張ろう。」2020年10月、私は心の奥底でこんな野心に燃えていました。そこから半年間、必死に奨学金制度に選ばれるための留学計画・書類作成を行いました。考えて、調べて、現地の人と連絡を取って、手続きをして…膨大な時間をかけて完成した応募書類でしたが、提出後暫くしてから受け取ったメールには「募集中止」の文字。「どうせ中止するなら書類を書く前に言ってよ」と思いましたが、コロナウィルスは謝ってもくれません。

ただただ、虚しさと不安が残りました。2020年3月当時2回生だった私は、就職活動のことを考えると、気軽に留学やワーキングホリデーの開始期間を延長することはできませんでした。結局、「とりあえず2020年度は休学しない」という決断しかできませんでした。

そこから始まったオンライン生活。アルバイトの予定以外はほとんど全てオンラインになりました。実家から通っている私にとって、通学時間を気にしなくて良い生活は、最初はとても快適でした。授業開始30分前に起きることも珍しくはなく、憧れの下宿生活のほんの一部分を体験できているようで楽しくもありました。

しかし、その楽しさも長くは続きませんでした。人と直接会って話す機会が極端に少ない生活

は、私自身も気づかぬうちに私の精神を蝕んでいきました。特に苦しかったのは、所属サークルの運営でした。オンラインだけで意思疎通が難しく、他の運営メンバーに自分の正直な気持ちを伝えられなくなりました。新入部員獲得も苦勞し、他の学年の参加者にも毎週のオンラインイベントを楽しんでもらえているか分からず、自分の気持ちを押し殺して無理矢理運営を続けていました。自分のマイナスな気持ちを一切吐露できないまま、「いつも笑顔でいなくちゃ」と無理に笑いながらパソコンの前に座る日々でした。

2020年の秋頃には、留学に行けるか分からない悔しさや就職活動への不安、将来への無力感も相まって、完全に心を閉ざしてしまいました。人と会ったり話したりすることが怖くなり、SNSを見ただけで逆に孤独感を覚えてしまい、本当に仲の良い友達意外と連絡を取れなくなっていました。

それでも、この1年間必死にもがいてきたつもりです。いつ使えるかは分かりませんが、もし将来どうしても海外で働きたくなった時に生きていけるように、日本語教師の資格試験を受け、合格しました。いつか留学に行ける時のために、アルバイトもできるだけシフトを入れ、コロナ禍でどこに行けるのか情報収集を続けました。それと並行して就職活動も行いました。「今できることは何か」、それだけを指標に走りました。今振り返って、あの日々が正解だったかは分かりません。もっといい日々が過ごせたのではないかとも思います。どうしてもあんなに人間不信に陥っていたのだらうとも少し後悔しています。ですが、これが等身大の私なののだらうとも思います。

来月からは、大学を休学して3か月だけ、とある国に留学に行きます。3か月という微妙な期間も、行先も、一年前に思い描いていたものとは程遠く、コロナ禍だからこその決断になってしまいましたが、私を応援してくれる人に感謝して最高の経験にしていきたいと思っています。コロナウイルスがあつて良かったと思える人生を、歩んでいきたいです。「今できることを着実に。」コロナウイルス関係なく、今後の人生で大事にしたい言葉です。

【文学部 20年度 2回生 塩】

(19)

2020年の上半期はアルバイトと環境の変化によるストレスに振り回されました。

当時カラオケ店と歯科医院のアルバイトを掛け持ちしていましたが、カラオケ店は二人一組で仕事をしていたところを3月ごろから人件費削減のために一人で全てこなさなければいけなくなり、緊急事態宣言が出て休業するまでの期間は忙しくて朝9時～夕方6時まで休憩なしの日もありました。幸い歯科医院は宣言下も診療していたので収入0にはなりませんでした。帰宅後は万が一のために服を脱いで入浴してから家族と同じ部屋に入り、夕食の時間をずらして一人で食べるようにしていました。買い占めの影響で不織布マスク、ゴム手袋、消毒用エタノールが医院に入荷しなくなり、在庫を切らさないように限界まで交換しないで使わなければいけなくなりました。

カラオケ店も歯科医院もクラスターが発生し、感染リスクが高いという報道を見聞きしていましたが、学費を貯めていたので休むわけにはいかず、そのような状況で客の吐瀉物や残飯を処理したり、患者の使用済み器具を洗浄したりするのはとてもストレスが溜まりました。

オンライン授業は先生方が試行錯誤してくださっていたので特に困ったことはなかったのですが、5月頃は気持ちに体が追い付かなかったのか、授業で動画を視聴している時に吐き気とめまいがして座っていられなくなることがあったり、昨日まで何もなかったのに朝起きたら顔中

にできものができていたことがありました。一日何時間も同じ姿勢で日光も浴びずにpcにらめっこしていたので、自分でも気が付かないうちに少しずつ体の調子が狂っていたのかもしれませんが。それから数キロ近所を歩いてみたり自転車を漕いで遠出したりして、外に出て運動する時間を意識して作っていました。

夏になり、徐々に大学に行く機会が増えてくるといつの間にか体も元の調子に戻りました。コロナ流行前は大学に行くのがめんどくさい、だるいとか言っていましたが、ずっと家にいるのもそれはそれで辛いのだと痛感した半年でした。やっぱり私は電車に乗って大学に来て、食堂のご飯をお腹いっぱい食べてまた授業を受ける、そんな生活がいちばん好きです。

【文学部 20年度 2回生 じゅんぽん】

(20)

新型コロナウイルスの影響により、部活動が全くできなくなったことが私にとって最も大きな変化でした。1回生の頃は、部活動中心の生活と言っても過言ではないほど、部活に励んでいました。

昨年、私が所属している軽音楽部は学際で1バンドだけライブができましたが、それ以外は全くライブができませんでした。部活動が禁止になった直後は、これほど長くこの状況が続くと思っておらず、またすぐ部活ができると思っていました。しかし、現実には厳しく、今でもたくさん制限がある中での活動になっています。それでも、部活動の緩和を申請したり、今までとは違う活動の方法を考えたりとできるだけ軽音部としての活動ができるよう工夫しています。

軽音楽部の醍醐味は他の人と一緒に合わせて演奏することだと自粛期間中により強く感じました。家で練習できる楽器もありますが、やはり部員と一緒に音楽をやりたいとたびたび思います。また、お客さんの存在もとても大きいと思います。ステージから見えるお客さんが楽しそうにしている表情や、一緒にステージを作っているような一体感が恋しいです。

部活動を思い切っただけできるようになるのが、いつになるかまだ分かりませんが、できることを自分で見つける力が試されるなと感じます。

【文学部 20年度 3回生 ゆず塩】

(21)

2020年は振り返ってみると、「一人暮らしのアパートの一室からどれだけ人とつながれるのか」ということにチャレンジし続けた一年だったように思います。

よく考えてみると例年通りそれなりに忙しくはあったはずなのですが、その毎日のイベントのほとんどがスクリーンを通して行われていた為に、学生生活特有の充実感を感じることに私には難しく感じられたのです。普段よりも人と繋がっているという意識を保つことに固執していたのかもしれませんが。なので暇さえあれば友人と連絡を取ってテレビ電話を繋ぎ、長い時には一日に12時間もの通話記録が残っている、なんていうこともありました。またこれには、大学も所属団体もバイト先も、そして自分たちも完全にオンラインに移行した情報伝達に慣れていない中で、それぞれが持っている情報を共有し助け合うという目的もありました。孤独だったからこそ、友人と繋がれている実感を得てようやく乗り切れた一年だったと思います。

(22)

【理学部 20年度 2回生 あげだし豆腐】

自粛生活を強いられた昨年の3月。予定では長期休みにしか会えない友人と遊ぶ予定をしていましたが残念ながら断念。代わりに通話する予定を立てて時間の許す限り話やゲームをしていました。アルバイトは塾講師をやっていたため感染拡大防止のためにしばらく休業になるかと思われましたが、手洗い・マスク・机を離す等で対策が行われたため収入は安定して入ってきたため金銭面で苦労はしませんでした。そんな環境の中コロナ禍で最もしんどかったことは勉強面でした。

私は物理学コースに所属していますが、正直微分積分や線形と言った基礎になる数学の考え方がとても苦手なので、オンライン授業になるならば何度も録画された授業を聞き返すことができるためラッキーだと最初は考えていました。しかしざ授業に参加してみると受講者の反応が見られないためか先生方は思い思いのペースで進めてしまい口調も淡々としていて結局画面に映された数式を目で追うことだけしかできず、「証明されたこの定義は分かったところでどう使えて何故うれしいのか」という説明が脳内に入ってきてませんでした。また普通に対面授業でも板書を取り切れず黒板を写真に撮って後から写すようにしていたのにオンライン授業になってもっと早く進むため板書は取れずスクリーンショットを取ることに必死になってしまう日もありました。

授業内容が入ってこなくてもオンライン授業は先生方が課題を出すため、ネットにある類題を探しては課題に応用できるかを期限ギリギリまで考えていて他の課題も手につかない、課題が終わって次にやる課題はもう期限がギリギリ、睡眠時間が削られるが解き切れていない状態で調べられる範囲で調べて記述して提出、次の課題も期限が近いという負のサイクルに陥ってしまいました。きっと友人に助けを求めればよかったのですが、もう少し調べてから聞こうと思っていたら時間がなくて聞けないという状態で毎週出る課題を見るだけで軽く鬱状態になっていました。こんなにわかっていない状態なのに毎週課題を出されて鬱状態になって、私は大学に何しに来ていたのかわからなくなりました。これが一番辛く、今思い出しても課題の量の圧迫感を思い出ししんどくなります。

そんな中、5月までの間でできていなかった実験が始まり、6月からは対面で人と会えるようになりました。週に一回だけで課題も増えましたが実際に人に会って話すことで本当にたわいない話や近況報告をすることでメンタルの崩壊を阻止することができました。きっと実験が無くなってデータ解析のみになったとしても通話だけでは癒されていなかったため精神病になっていたと思うので実際に人に会うことが許されて本当に良かったです。

(23)

【理学部 20年度 4回生 ゆっちいー】

コロナにより、人と話す機会がかなり減ってしまったことで孤立感を感じることもあり ました。4～6月の自粛期間中、私は公務員試験の直前期であり、その試験勉強に取り組んでいました。それまでは、大学や図書館へ行き、友達と勉強ができていましたが、あらゆる施設が 閉鎖されてしまったため、寮の自分の部屋で1日中勉強しなければならない環境に追い込まれました。

また、ゼミや授業がオンラインになったことにより、学科の友達とも会えない状態でした。そして、大学の入校禁止により、ゼミの先生、大学生協の職員の方にもお会い することができ

ず、人と話すことがほぼできなくなっていました。

この時、自分の夢に向かって全力で努力し続ける過程の中で、自分の様子を気にかけてくれる人、たわいもない会話をし合える人の存在に支えられていたことを感じました。そして、友達や家族とたまに電話をし、勉強の話を聞いてもらうことで息抜きをし、モチベーションをなんとか保ち続け、乗り越えることができました

【生活環境学部 20 年度 1 回生 うめ】

(24)

●授業について

前期では実習のみ、後期は実習といくつかの専門科目が対面授業で行われました。対面授業がある日に連続して授業がある場合はオンライン授業も大学で受講したり、学食で友達と昼食を食べたりしました。オンライン授業では多くの科目で出席確認のレポートが出題されるため、予定帳に提出期限のメモを取るようになっています。授業で使用する資料はパソコンに授業ごとのフォルダを用意して時間割のような形でデスクトップにまとめておくとう便利です。また、オンライン授業の教室 URL は受け取った時点でコピーをして Word にまとめておくとう授業当日にスムーズに入室することができて良かったです。

●食生活について

下宿をしているため、オンライン授業のみの日は基本自炊で対面授業がある日は生協で食べることが多かったです。自分の料理を食べ続けていると飽きてしまうことがあるため、食堂とカフェで美味しいご飯をお手ごろな価格で食べることができてとても嬉しいです。

●健康について

2020 年はコロナの影響で人と会うことが難しく、前期の間はなかなか友達ができずに家にほぼ籠りきりの状態でした。そのため体調を崩すことはなかったのですが気分が落ち込んでしまう日が多かったです。大学内で同じように感じている仲間を見つけて SNS で授業の疑問点や一人暮らしの不安について話して交流したり、そこで趣味のあった人たちと会ったりすることで不安や孤独感を軽減することができたと思います。オンライン上であっても人と話す機会があることはストレス解消につながったので、英コミや交流会などに参加してたくさんの人と関わったことはとても大きかったです。

●実家について

入学直後は図書館の利用ができず授業はすべてオンラインであったため、5月の半ばまでは実家で生活していました。奈良から実家へは3時間ほどで行けるので夏休みや週末の空いている日などを利用して帰省をしました。しかしながら、お正月は多くの人が帰省のために移動すると考えられ、もしコロナに感染していた場合に祖父母にうつしてしまう恐れがあったため帰省をあきらめました。帰省ができなかったことは残念でしたが、奈良で年末年始にかけてのアルバイトをすることができ貴重な体験になりました

【理学部 20 年度 1 回生 かにっこ】

(25)

私は関西圏外の出身なので奈良で一人暮らしをしています。奈良には今年の4月に引っ越しに来ました。入学式の一週間前に引っ越し、一人暮らしを始めました。しかし新型コロナウイルスの影響で入学式は中止になり、ガイダンスが行われてすぐに大阪府や兵庫県に緊急事態宣言が出されたため、授業も対面では行われないことが大学から発表されました。授業も4月に始まると思っていたのですが、ほとんどの授業がGW明けに始まりました。今思うと、約一ヶ月

間は授業がなく、たくさん自由な時間がありました。しかし当時はいつから授業が始まるのか、どこを見れば詳しい情報がわかるのか、大学にはいつから通えるのかといったことがわからず、不安を感じてばかりで、他のことをする余裕なんてありませんでした。

一人暮らしにも奈良での生活にもまだ慣れておらず、一通りの家事をこなしたり、一人で外出したりするのに大きな労力を使い、一人で生活することに毎日疲労感を感じていました。授業はオンライン形式で始まりましたが、対面授業がいつから始まるかわからず、実家に帰ろうと思っても戻れないという状況でした。幸いにも私は、一人暮らしには大変さを感じていましたが、ホームシックにはなっていなかったのも、何とか奈良で暮らせていました。結局、前期が終わるまで一度も実家に帰ることなく奈良で生活をしました。

私が入学前に特に心配だったことの一つは友達ができるかということでした。私は実験や実習の授業をとっていたため、オンライン授業がメインであった前期期間中にも、6月ごろから対面で授業が始まったものもありました。そのため、大学で授業を受けた際、何人かと仲良くなることができました。しかし、対面授業は週に数回しかないので、仲良くなるのに時間がかかったり、数人としか仲良くなれなかったりしたのが残念でした。一回生が終わった今でも、同じコースなのに一度も話したことがない人もいます。

昨年度は私が思い描いていた大学生活とは程遠い一年間でした。前期は特に気持ちが沈んだり、不安な思いをしたりすることが多かったです。しかし、家族や高校時代の友人、大学の職員や教授など多くの人に様々な面で助けられたと思います。慣れない一人暮らしやオンラインでの授業で気遣ってもらいました。コロナで大変な思いをしたのはみんな同じなのにたくさん助けてもらったと思っています。今年度は昨年よりコロナに対して前向きに向き合えると良いと思います。大変な思いをした一年でしたが、貴重な経験ができたと思って、二回生以降も頑張っていきたいと思っています

【理学部 20年度 2回生 ゆ】

(26)

コロナ禍の私の動きは、昨年3月4月は自動車学校とサークルの新歓活動の準備のため実家には帰らず比較的奈良に滞在していました。しかし、全国で緊急事態宣言発令の影響で自動車学校が休校、大学が入校禁止となり、自分が力を注いでいたどちらもできなくなりました。授業もオンラインになるということで両親と相談し実家に帰省しました。実家では姉がオンライン授業を受け母がリモート会議をしており、3台のパソコンでWi-Fi電波を取り合う状態となり授業がうまく受けられない日もありました。

7月、対面でしか行えない実験実習が始まると連絡がありまた奈良に戻ってきました。帰省中全くアルバイトができていなかったうえに、観光客減少などにより私のアルバイト先はどちらも休業や社員のみでの営業となりシフトが出せない日々が続きました。そこで、新しいアルバイトを始めました。当時の私の時間割はオンライン授業よりもオンデマンド授業が多かったため、本来ならアルバイトすることができない授業時間帯にもシフトを出し、アルバイトできていなかった期間の分も働きました。その分、もともと集中しづらかったオンライン授業やその課題を後回しにしてしまいがちになりました。

私はコロナ期間、昨年前期にオンライン授業の単位を2つ落としてしまいました。ここからは言い訳といわれようと仕方ないですが、オンライン授業での集中しづらさ、同級生と一緒に受けられない隣と相談できない環境、課題の多さ、等になかなか慣れず昨年前期は勉強のモチベーションが大きく下がってしまいました。もちろん自分が望んで大学に来て、時間割をつくって勉強

していたのですが、同級生と話をしたり 2 人 1 組で実験したり一緒に学食を食べつつ課題を進めたりする時間も大学生活で大事にしていたことなので、それができなくなってしまった状況が苦しかったです。当時はいっしょの Zoom で授業を受けていたり課外活動をしていたりしても、顔は見られず名前を見ていただけの状況でした。SNS もあまりしていなかった私は誰が奈良にいて誰が帰省しているのか、顔が見られていない子たちは元気になっているのか、同級生の子たちの状況がわかりませんでした。

その苦しかった状況の分、コロナ禍で得られたものも多かったと感じます。1 点目は新しい趣味です。もともと旅行やお買い物など外に出ることが好きだった私はコロナ禍でどれでもできなくなりました。その代わりに本を読むようになったり自炊をきちんとするようになったりとインドアのできる趣味がたくさん増えました。2 点目は自分 1 人でできることが増えたことです。コロナ禍の他人の状況がわかりづらい雰囲気を逆手に、いままで他人に甘えてばかりだった自分ができる限り一人でやろう、できなかったら誰かを頼ろう、と少し成長できたと実感したことが多々ありました。コロナ情勢が始まったばかりのころはたくさん悩みましたが、今は心のどこかでこの状況をうまく活用できたと思っています。

【理学部 20 年度 2 回生 ラピ子】

(27)

コロナ禍でマスクが当たり前になりました。街を歩いていて靴を履いていない人がいないようにマスクをしていない人は 1 人もいませんでした。

同じように当たり前になったことはなるべく非対面で何事も実施することです。授業も部活もオンラインが当たり前、一時期体育の授業でさえオンラインになったと聞きます。

私は教職課程の授業のほとんどをコロナ禍に取ることになったのですが、1 番苦労したことは模擬授業の作成でした。15 分間の模擬授業で、黒板を用いることが条件でした。その模擬授業の発表は私の年はコロナにより zoom でのオンラインだったので、事前に黒板で授業をしている様子を自分の姿もいれて撮影し、その動画を授業内で見せるといった形になりました。私は大学に行く機会がなかったのだからかなり困りました。そこで、壁一面に厚紙と白い紙を貼って黒板の様に模擬授業を作成することにしました。無事やりきりましたが、対面授業ならもっと楽だったなと感じました。

コロナ禍でオンライン授業というのは私たちが特別なので、模擬授業はできるだけ対面を意識したものが良いということだったのですが、オンライン授業も対面授業も経験することで対応能力を身につけることができたように感じます。

【理学部 20 年度 2 回生 しましま】

(28)

オンライン授業というのが初めての経験だったのでとにかく不安でいっぱいでした。課題の取りこぼしや授業を見逃してしまわないように、日々気を使っていました。

最初はややストレスもたまりましたが、慣れてきたらオンラインの良さが見えてきて、今ではオンライン授業増えないかななんて思っています。

【文学部 20 年度 2 回生 みち】

(29)

2020 年度は新型コロナウイルスの影響で、私が大学 1 回生として過ごした 2019 年度とは全

く異なる大学生活を送りました。1 回生の頃は、大学で先生や友人と顔を合わせて授業を受けることが当たり前でした。しかし、2 回生になると同時に新型コロナウイルスが流行し、対面授業を行うことが難しくなったため、大学に行くことができずパソコンを使用したオンライン授業が当たり前になりました。オンライン授業では、パソコンを使用して授業を受けなくてはならず、また課題も多く出されたため、一日中パソコンの画面を見ていなければならなかったり、同じ姿勢で何時間も作業する必要があるため身体的な疲労が溜まりやすかったです。

また、新型コロナウイルスの流行もあり、気軽に外出することもできない時期があったため、外出し気分転換をすることも難しく精神的に辛い時期が続きました。そして、毎日大学で授業を受けられているときは、友人と顔を合わせる機会がほぼ毎日あり、昼食を一緒に取り、空きコマではおしゃべりをしたり授業で分からない部分を教え合ったりすることができ、友人との直接の会話で刺激を受けたり、励まされたりすることが多くありました。しかし、コロナ禍では友人と直接会って会話することが難しく、また家に一人であることが多かったため、みんなが苦勞し頑張っているのに、周りの状況を知る機会が少なかったため、「自分だけがこんなに苦勞して大変だ」という気持ちに陥ることが多く辛かったです。

そんな中で、夕方散歩に出かけたり、積極的に友人と連絡を取り、状況を報告し合い励まし合ったり、離れて暮らす家族とテレビ電話をするなど、自分なりの気晴らし方法を見つけ乗り切りました。2020 年度は、コロナ禍により、イレギュラーな事が多く、大変な一年でしたが、だからこそ自分なりの工夫の仕方を知り、今まで当たり前だと思っていたことが当たり前ではないことに気づくことができました。このような状況が今後起こって欲しくはないけれど、今までにない状況にも対応できる自分を知れ、貴重な経験だったのではないかと感じています。

(30)

【大学院 20 年度 1 回生 Jane】

一年ほど前の春先はコロナ禍で学校の講義もアルバイトもなくなってしまったことで何もすることがない状況でした。ニュースをみて不安になったり、日々の過ごし方に悩んだりしていました。そんな時、中止になると思い込んでいた英語コミュニケーション講座がオンライン形式で提供することが決まりました。私は学生リーダーとして運営をしていくために、オンライン対応の準備をすることになりました。何をしたらいいのか良いのかわからない生活、そして人との繋がりが薄れていた私にはオンライン上で学生リーダーたちと力を合わせ、実現できるかわからないようなオンライン講座の準備を進めていくことで前向きな気持ちになりました。

英語コミュニケーション講座が中止ではなく、オンライン形式へ変更になったことが非常にありがたかったです。コロナ禍でも何かに挑戦し、誰かと一緒に取り組むことで不安な気持ちを少し忘れ、明るく頑張ることができました。今後も状況が変わるのをただ待つのではなく、その状況に合わせたものをつくるという選択を大事にしていきたいです。

(31)

【生活環境学部 20 年度 2 回生 まっちゃんちゃ】

コロナウイルスが流行した昨年は、1 回生の頃の大学生活からは大きく変化した 1 年でした。今まで毎日のように大学に行くことが当たり前だったのが、特に前期は週 1 回の実験だけでしか行かなくなり、オンライン授業・オンデマンド授業をこなす毎日で正直とても大変でした。オンデマンド授業で出される課題は、90 分の授業時間では終わらないほどの量のものが多く、そ

れらをつつの締め切りの管理をしながら取り組むのに精一杯だったなと振り返ってみて思います。

土日の休日も含めて常に課題があるというプレッシャーもあり、心休まる時間はご飯を食べているときくらいだったように思えます。そのくらい、昨年の1年間は日々必死で苦しいときの方が多かったです。しかし、それと同時に、先生方が試行錯誤しながら私達学生のために教えることに尽力されていることも伝わってきていて、それを思うと頑張ろうという気持ちになりました。

大変な1年間でしたが、私の中で大きな収穫になったこと、昨年1年間頑張って良かったなと感じたこともあります。学校に行く機会がかなり減ったため、大学の友達を含め人と接して会話することが全くない日が続いたことも多かったです。何日間も人と話していないなとふと感じることもありました。このことから、今まで当たり前だったことで突然当たり前でなくなることがあるという大切なことを実感できました。

昨年は、LINEなどで友達と課題のことについて相談し合ったり会話したりすることが多く、LINE上でも友達や家族と関わるることができていることに安心感を覚えました。人が生きていく上で他人と繋がっているという実感はすごく重要なものなのだと思います。また、昨年1年間自宅でオンライン授業・オンデマンド授業にしっかりと取り組んだことで、自宅で学習する習慣が身に付いたことはとても良かったなと今振り返ってみて感じます。大学生になって勉強に対するモチベーションが少し下がってしまっていたのですが、授業や課題をこなすことに精一杯だった中でも、自分が何を学びたくてこの奈良女子大学に入学したのか、将来の夢に向けて大学生の今やれることは何かを改めて思い直し、学びに対するモチベーションを高められたように思います。今は、「学びたい」という意欲から自然と机に向かっています。

これまでとは様変わりしたと言っても過言でない程例年になかった昨年、大変なことも多かったですが決して無駄な1年間ではなかったと心から思っています。得たものを大切に、残り2年間の大学生活を充実したものにしたいです。

【生活環境学部 20年度 2回生 さくらもち】

(32)

前期の授業は、一つの講義以外全てパソコンを使用した授業スタイルでした。5コマ全て授業がある時はパソコンの前でずっと授業を聴く状態であり、目が疲れたり肩が凝ったりしました。オンライン授業では、誰かとコミュニケーションをとる回数が対面授業と比較して極端に少なくなるため1回生の時に経験したフルコマの辛さとは異なる辛さを感じました。対面授業ならば分からないことや聞き逃してしまったことを友達にすぐ尋ねることができましたが、オンライン授業ではそのようにはいかないので自分自身で課題などを管理する必要がありました。

また、一日中パソコンの前で授業を受けるため運動量が減り不健康な生活になりそうだったので、毎日10分程度家の中でダンスをしたり、人通りが少ない夜に友達と二月堂までランニングをしたりして少しでも体を動かすようにしていました。

さらに、サークル活動を自分が想像していたようにできなかったのがすごく悔しく感じています。新歓活動では1回生と直接会って、サークルの紹介をすることもできず1回生と2回生で交流する機会がほぼありませんでした。去年先輩がしていたように自分も今年はこんなことをやってみたい！というものがたくさんありました。しかし、それらを実現することは叶いませんでした…。それでもパソコンを使って活動を続けたサークルもありました。自分が思い描いた

通りの活動はできませんでしたが、工夫して活動を楽しめたように感じます。

私は飲食店でアルバイトしているのでコロナの影響を受けシフトがコロナ前の半分以下になってしまいました。アルバイトがないと賄いもないので、毎食自分で作る必要がありました。さらに、アルバイトがなく、学校に行く機会もほぼなかったのでお家で過ごす時間が増え人と話す機会がとても減り寂しく感じるが増えました。そのため家族や友人と電話する回数がコロナ以前よりもその時は増えたように感じます。またこの時、改めて家族や友達の大切さ、感謝の気持ちを気づくことができたように感じます。

【文学部 20年度 2回生 メセナ】

(33)

2020年コロナ禍エピソード

●授業

対面授業は前期はほとんどがオンラインに、後期は対面授業とオンラインがおおよそ半々の割合、というような感じであった。画面を見続けることで目の負担を感じることもあったが、それ以上に毎回の感想や課題を提出することが大変だった。一つの課題が終わったと思えば、他の講義の課題がアップされまた取り掛からなくてはいけないということの連続で、常に「やらなくてはいけない課題を抱えている状況」であったことが精神的に辛かった。

わずかな対面授業で直接的に誰かと関わりながら学べる環境や、オンライン授業で声を出して議論し合える機会は救いであった。オンラインやオンデマンド授業であると、どうしても相互作用のやり取りがしづらくなるため、対面授業の方が良いと思う場面もあった。

●食生活

自粛期間で外出を控えるようになったこと、オンライン授業が主になったことで家にいる時間が増えたり、バイトが入れないことで賄いをもらえる頻度が減ったりしたこともあり、自炊をたくさんするようになった。今まで挑戦したことのない料理を作ってみたり、栄養バランスを考えた献立を考える時間が持てたりしたことで、むしろコロナ前よりも健康的な食生活を送れたように思う。

料理をすることがより楽しく好きになったように思う。しかしながら、料理をする気分にならないときもあり、そのような時は生協のテイクアウトのお弁当を購入した。コロナ禍での学生の金銭面を考慮して、安く販売してくださったことは非常にありがたく大変助かった。

●健康

外出を自粛するために、どうしても運動不足になりがちであったため、人出が少ない朝や夜に散歩やランニングをしたり、家の中でYouTubeでアップロードされたダンス動画を見て踊ったりした。食生活にも気を配った。

心の健康という点に関しては、やはり人に会わなくなった分、誰かに話すという機会が減り一人でいろいろと考え悩んでしまったり、一言も発さないで一日が終わりかねないこともあったため、友達と頻繁に電話をして気晴らしした。

●下宿生活

自分自身、アウトドアであるため好きな旅行や純喫茶巡り等の趣味ができなくなったため、家でできる趣味を新しく見つけて楽しみにした。映画を見たり、フランス語の勉強をしたり、ダンスをしたりして毎日を過ごした。上記の健康の点でも記したが、友達との通話の時間は自粛生活の一番の楽しみであった。たわいのない話をしたり、お互い英語を磨きたいということで、英語

で毎日通話するということも行っていた。そのおかげで、英語やフランス語などの語学の力はかなりついたのではないかと思う。

●サークル

大学から活動禁止の要請が出たために、2020年度の活動はほとんどと言っていいほどできなかった。しかし、対価としての活動はできていないのに対し、維持費として必要であるために部費は払わなくてはならないという状況もまたすこし苦しかった。また、この2回生が最も時間がありサークルに時間を費やせる年であると思っていたため、その年に活動ができなかったことは悲しかった。この時期に部長になったことで、LINE等のSNSを主として（直接会っての話し合いができなく、文面や通話のみで物事を決めなくてはならない状況）組織をまとめていくなくてはならないことの難しさも痛感した。

●実家

関東に実家があるのだが、やはり東京に近いということもあり、しばらくは帰らない方がいいという旨を親からは度々言われていた。関西圏の比較的近くに実家がある友人は、ずっと地元に行ったり頻繁に帰っていたりしたためにうらやましく思うこともあったが、しょうがないことだと言いつけさせた。この3月に半年ぶりに実家に帰れたのだが、その嬉しさはとても大きいものだった。

【生活環境学部 20年度 2回生 みま】

(34)

今年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、私にとっての当たり前がそうでなくなった一年でした。突如一変した生活になかなか適応することができず、辛いこともたくさんありました。

これを書くにあたってこの一年を振り返ってみましたが、正直どうやって乗り越えてきたのかははっきりとは思い出せません。それくらい、目の前の課題をこなすのに精一杯で、余裕のない日々を過ごしていたのだと思います。

大学に入学して一年が経ち、大学生活や一人暮らしにも慣れてきて、二回生になったらもっと楽しい毎日を過ごしたいと思っていました。しかし二回生になった私を待っていたのは思い描いていたような生活ではなく、部屋で一人きり、朝早くから夜遅くまでパソコンと向き合う毎日でした。

大学生になって初めて自分のパソコンを持ちましたが、1回生の間は実際に使用するのはレポート作成くらいで、試験期間以外は充電もせずに放置していることもあったほどです。オンライン授業での慣れない操作への戸惑いや、ほとんどの講義で出される大量の課題をこなすために授業時間外も長時間画面を見続けることで、心も体もだんだん疲弊していきました。

それだけでなく、大学は入構禁止、課外活動も禁止、アルバイト先も一時店を閉めることになり、一人暮らしの私は人との繋がりを絶たれてしまいました。思い返すとこれがコロナ禍で一番辛かったことかもしれません。

連絡を取ろうと思えばいつでもスマホを使ってできましたが、余裕がないのはみんな同じで、それまでしていたような雑談ができる雰囲気ではありませんでした。友達とのLINEを見返してみましたが、前期の間はほとんどの会話が授業の確認のことばかりです。くだらない会話が盛り上がることは心に余裕があるからこそできることで、そうやって過ごす時間がどれだけ尊いものかを痛感します。

前期を終え、迎えた夏休み。予定していたような旅行に行くことは叶いませんでしたが、短時

間でも時々友達と過ごせるようになったことが本当に嬉しかったです。大学にも入れるようになり、後期からは授業で同じ学科の子の顔を見ることができ、普通に授業が行えることのありがたさを感じました。

誰にも会えずに一人画面と向き合い続けた半年間は、当時の一日のスケジュールや心情をはっきりと思い出せないくらいに苦しいものでした。

今も感染状況は日々変化しており、またいつあのような生活に戻ってもおかしくはありませんが、あの孤独な生活をもう一度送るのは私には耐えられません。少しでも早く日常を取り戻せるように、今は少しの我慢をして祈るばかりです。